境界を生成する実践：情報を伝えないことの意味をめぐって

青　山　征　彦

１．はじめに

本論では，実践のコミュニティ間の境界をめぐる問題について検討する。実践のコミュニティ間の境界については，近年，境界を越えて協働する実践である境界横断に理論的な関心が集まっている（レヴューとしては青山・茂呂（2000）；最近の展開については香川（2008）を参照のこと）。

境界横断という概念を提案した Engeström，Engeström, & Kärikäinen（1995）は，普段は異なる業務を担当しているチームが，協力して課題にあたることによって，新たな学びが発生すると主張した。彼らは，熟達に向かっていくような学びを垂直的学習と呼ぶなら，こうした学びは他者との出会いによって促される水平方向の学びであるとして，水平的学習という概念を提唱した。水平的学習のきっかけとなるのは，普段とは異なる人々との出会いであり，そのためには実践のコミュニティを越えた協働が必要である。これが，境界横断という概念のもともとの位置づけである。

しかし，近年の議論では，境界横断に対する関心は変化しつつあるように見受けられる。Engeström et al.（1995）では，どのように境界横断や水平的学習がなされるかが検討されていたが，そもそも異なる実践のコミュニティの垣根を越えて協働することは，それほど容易なことではない。そのため，近年の研究では，境界横断の難しさが指摘されるようになっている。香川（2007）は，看護学生が病院での実習に参加することで感じるさまざまなギャップについて検討した結果，看護学校での授業と，本物の患者を対象にした実習とでは，時間の流れに根本的な違いがあることを見出している。こうした根本的な違いを持つ実践のコミュニティを接続することで普段は気がつかないことを学ぶことができる，というのが水平的学習という概念の意味するところではあるが，当然のことながら根本的な違いは交流の障壁にもなる。

ここからわかることは,境界はかならずしも横断しやすくないということである。

そもそも境界がそこにあるのは，組織やコミュニティの歴史，実践の違いなど，それなりの理由があってのことであろう。いつでも横断できるようにしないために，あえて境界が作られていると考えることは十分に可能である。しかし，境界横断の研究では，横断の価値が語られる一方で，こうした境界の持つ意味が十分に吟味されてこなかったように思われる。

そこで，本論では，境界横断を別の側面から検討したい。本論で注目するのは，境界を作る実践である。青山・茂呂（2000）は，境界横断を行わないようにコントロールする実践は，境界を定義する実践でもあることを指摘している。横断できないことによって，境界はより明確になるからである。本論では，そうした境界横断を行わせない実践として，「伝えない実践」を採り上げる。ここでいう「伝えない実践」とは，自分の持っている情報を相手に伝えないような実践を指す。こうした実践には後述するようにいくつかのタイプが認められるが，いずれも境界の横断を妨げたり，そもそも阻害したりするような働きを持つと考えられる。

本論では，「伝えない実践」を検討することにより，情報を伝えないことで境界を作り出していくしくみを考えてみたい。そうした検討をもとに，実践のコミュニティにおける境界の意味，さらには境界横断というものの意味を，これまでとは違う側面から考えることが本論の目的である。

２．「伝えない実践」：事例による検討

「伝えない実践」として本稿で採り上げる事例を大まかに分類したものを，表に示す。「伝えない実践」にはさまざまなものがあると考えられるが，本稿での事例が，それらの多くをカバーしているかどうかは定かではない。そのため，ここでの分類は，今後，改変されていく可能性があることを断っておく。

本稿での事例は，障壁・限定・暗号・カギの四つに大きく分類できる。以下では，それぞれについて事例を示しながら検討する。

表　「伝えない実践」のタイプ

分類	制限の範囲	制限の可視性	例
障壁	一切の情報を伝えない	可視	ジャミング
限定	制限された情報を伝える	可視になりにくい	国民受信機
		可視	グーグルの検索制限
暗号	知識のある人にのみ伝える	可視になりにくい	隠語　赤福の記号
カギ	カギを持つ人だけに伝える	可視	ログインの必要なＷＥＢサイト

１）障壁

関係者に対して，一切の情報を伝えないようにする実践を，ここでは障壁と呼んでおく。「伝えない実践」としてはもっとも明確なものとも言えるが，それゆえに，境界を作っていることが関係者に容易に知られてしまうという弱点もある。ここで挙げた事例の他にも，太平洋戦争後に，戦時中の教科書を部分的にすみ塗りにして読めないようにしたことなどが，この分類に当てはまる。

事例１：ジャミング

ジャミングとは，特定の放送を受信できないようにするために妨害電波を発信することである。通常は，妨害したい放送の周波数と同じ周波数で，大きな出力で雑音等を放送する。太平洋戦争当時の日本が米国の宣伝放送に対して行っていたことでも知られるが（田中，2009），今日でも一部の国で行われている。以下は，２００８年に北朝鮮が，２０１０年にイランが行ったジャミングについての新聞記事である。

総務省は四日，日本人拉致被害者向けの短波ラジオ放送「しおかぜ」に対し，妨害電波が発信されていたと発表した。同省は電波が北朝鮮からの発信であると特定した。国際電気通信連合（ＩＴＵ）が定める無線通信規則に違反するとして，五日にＩＴＵを通じ北朝鮮に通報する。（日本経済新聞　2008年4月5日朝刊）

欧州連合（ＥＵ）は22日の外相理事会で，イラン当局による衛星放送の受信妨害やインターネットの検閲を強く批判し，即時停止を求める方針を決めた。反体制派を締め付けるため，英国放送協会（ＢＢＣ）のペルシャ語放送などが定期的に受信妨害を受けて

いるという。(日本経済新聞　2010年3月23日夕刊)

これらは，いずれも他国から流れてくる情報を遮断することによって，国内の情報統制を行うことが目的であろうと推測される。ただ，雑音等で放送を受信できなくするという手法であるため，情報が制限されていることは聴取者にも明らかである。また，一部の聴取者に選択的に情報を届けるといったこともできない。妨害の規模にもよるが，多くの聴取者が一斉に受信を妨害されることになる。

２）限定

何らかの方法で，情報へのアクセスが限定されることを，ここでは限定と呼んでおく。情報が限定的に伝えられていることは，情報の受け手には可視になりにくい。Winner（1986）は，高級リゾート地に渡るための橋をバスが通れないように設計することで，バス移動中心の低所得者や黒人を閉め出そうとしていたのではないかと論じた。Winner（1986）の指摘は，この分類にもあてはまる。もし，実際にバスが通れないように橋が設計されていたとしても，バスの利用者にはそのような意図は知られにくいのと同様に，情報が得られないように設計されていても，まさに情報が得られないことによって，そのような意図は明らかになりにくい。

事例２：国民受信機

事例１で述べたように，国内の情報統制のためには，放送の受信を妨害するという手法がある。ただ，放送を受信させないより強力な手法として，受信機を持たせないという方法もある。戦時下の日本でも，日本軍敗退のニュースを伝えていた国際放送を受信できないようにするために，占領地内で短波受信機を所有することを禁止し，短波を受信できないように受信機を改造したり，該当する受信機を買い上げたりしていた（福田，1994)。

第二次世界大戦当時のナチス・ドイツでは，国民受信機３０１と呼ばれる受信機が開発されたが，これは性能上，ＢＢＣ（英国放送協会）など，海外からの短波放送が受信できないものであった。

ドイツの二八のラジオ装置製造会社が，宣伝省の委託で共同で開発したこの受信機は，構造をできるだけ単純にして値段を安くし，誰でも買えるようにしたもので，国民車のラジオ版だった。簡単な装置なので地域の放送しか入らず，外国の放送などは聞けなか

ったが，そもそも外国の放送を聞くことは禁止だったのだから，それを買わせることは，ナチにとっては二重に都合が良かったのである（平井，1996，p. 39）。

ジャミングと異なるのは，国民受信機で放送を聞いている人にとって，ＢＢＣはそもそも選択肢にも入らないという点である。情報へのアクセス制限がなされていること自体が聴取者に隠されているとも言える。

事例３：グーグルによる中国国内での検索制限

2010年，グーグルが，中国当局の指導に反発して，中国で提供している検索サービスから撤退することを検討した（最終的に撤退はしなかった）。グーグルが中国で提供している検索サービスでは，中国当局が望まない検索結果を削除して表示する自主規制が行われていたし，グーグルが香港で提供しているサービスを利用しても，天安門事件など政治的に敏感な話題は検索してもタイトルしか表示されず，内容が閲覧できないようになっているという。以下に示す新聞記事からもわかるように，どこまで情報にアクセスできるようにするかは，きわめて政治的な問題である。

グーグルによると，同社は22日，中国当局が望まない検索結果の表示を自主的に削除する「自己検閲」をかけていた中国版の検索サービスを停止。中国版のサイト「Google. cn」にアクセスしようとすると，香港版の「Google. com. hk」に自動的に転送されるようにした。香港版は，グーグルが香港にあるサーバーを使って運営しているサイトで，中国語の画面が表示され，自己検閲なしに検索できるようにした，としている。

23日午前，北京から香港版へのアクセスは不安定になっている。また「天安門」を検索すると，1989年の天安門事件に関するサイトも検索結果リストには表示されるが，サイト本体を見ようとしても多くがつながらない。

グーグルは22日の声明で，香港版への中国本土からのアクセスについて「いつでも妨げることができることは十分承知している」とし，中国政府が今後，香港版を中国本土では見られないようにする可能性を示唆した。（2010年3月23日　朝日新聞夕刊）

グーグル騒動の前後で，中国の利用者が得られる情報は実質的には変わらない。中国版は６月末から，ネットショッピングなどと並んで，香港版へのリンクを置く「表紙」に過ぎなくなった。中国本土の利用者は，中国版ではキーワードを入力できないので，

香港版に飛んでから検索する。

香港版は中国本土からも政治的に敏感な言葉も検索でき，項目の一覧は表示されるが，中身は見られない。これは騒動前後で変わらない。

天安門事件など政治的に敏感なサイトが表示されたのは，グーグルが中国からの撤退検討を表明した今年１月からしばらくの間だけだった。(2010年7月22日　朝日新聞朝刊)

香港版は，直接つないでも中国版から転送しても，一貫して政治的に敏感なサイトもヒットし，項目の一覧が表示される。ただ，中国本土からはサイトを開けず，中身は見られない。(2010年7月22日　朝日新聞朝刊)

同様のことは，他の国でも行われている。以下は，タイでの閲覧制限に関する新聞記事である。

タイ政府は18日までに，各国の機密や企業の秘密情報を暴露する民間ウェブサイト「ウィキリークス」の閲覧制限を始めた。同夕現在，タイ国内からアクセスはほぼできない。タクシン元首相派の反政府デモをきっかけに出されている非常事態令に基づく決定としているが，具体的な理由などは明らかにしていない。(2010年8月19日　朝日新聞朝刊)

どちらのケースでも，ジャミングと同様に，情報にアクセスできなくしているものの，アクセスが制限されていることは，検索サイトのユーザにも容易にわかる点が特徴である。この点は，事例２の国民受信機とは異なっている。

３）暗号

関係者にだけわかる隠語を用いることで，関係者には情報を伝えつつ，他の人にはできるだけ伝えないようにする方法を，ここでは「暗号」と呼んでおく。

事例４：デパートなどの隠語

ここでは，デパートなどで用いられる隠語を採り上げる。隠語はデパートに限らず，さまざまな業種で用いられている。その目的は多くの場合，目の前にいる客にとって不快な情報や，客には伝えたくない情報を，関係者だけに伝えることにある。

例えば，デパートでは以下のような隠語が用いられているという（米川，2001）。これらの隠語は，デパートによって異なる。

食事……「有久（ありきゅう）」「一番」など
休憩……「伊勢（いせ）」「九番」など
トイレ……「いの字」「十番」「三軒屋（すけんや）」「にのじ」など
万引き……「川中さん」「きんざえもん」「ななばんさん」など

こうした隠語は，客にはわからないようにしつつ，店員同士で連絡するために発達したと考えられる。特に，万引きについては，万引き犯にも知られないように連絡することが必要になる。そのため，表向きにはわからない伝達を行う，いわば二重構造を作り出すために隠語が用いられていると言えるだろう。

こうした事情はデパートに特有というわけではなく，ファストフード店や量販店などでも，同様の隠語は見られる（用いられる隠語は店によって異なる）。いずれの場合も，隠語を知っている人にしか意味が伝わらないという点で，知識をもとにした情報伝達の制限であるということができる。

事例５　赤福の消費期限偽装

三重県伊勢市の銘菓として知られる「赤福」が，売れ残りの商品を出荷し直したり，消費期限の日付を偽装したりして売られていたことが2007年に発覚し，社会問題化した。工場の担当者は，こうした複雑な偽装を行うにあたって，製造日印に細工をしていたという。

> 製造日の偽装や消費期限切れの商品の再使用などが明らかになった餅菓子メーカー「赤福」（三重県伊勢市）は，赤福餅の冷解凍の有無や売れ残りを再包装したものかなど商品ごとに違う複雑な工程を，担当者が一目で見分けるための細工を製造日印にしていた。消費者には分からない赤福内部のいわば「暗号」。同社は「日常的な偽装は順次中止していった」としているが，本社工場の工場長は，繁忙期に前もって先の日付を記す「先付け」の目印にしていたことも明らかにした。
>
> 記号は「謹製」と書かれた製造日印にあり，日付の後に「.（ピリオド）」と「－（横棒）」を付けていた。この両方があるものは，一度店頭に並んで売れ残った商品を回収して包装し直す「まき直し」をした商品。横棒だけのものは，製造日の日付を，前もっ

て翌日以降とした「先付け」のもの。また，消費期限の後にピリオドのあるものは，冷解凍の工程を経たことを意味する。いずれも回収後に，再度まき直しや冷凍する工程に回らないようにしていた。(2007年10月24日　朝日新聞朝刊)

これは，日付の後に付けられた小さな記号によって，消費者には知られないように，しかし関係者にはその製品の詳細がわかるように工夫された例である。冷解凍したものかどうか，店頭に出たものかどうかがわかるようになっていたのは，再包装して出荷できるか，冷凍することができるか，という現場の知りたいことに対応していたと考えられる。逆に，こうした記号のないものは新規に製造されたものであるため，冷凍してもよい，包装し直してもよい，と認識されていたという。

製造日印にある小さな記号によって，工場の関係者にとっては一目で必要なことがわかる一方，このように複雑な意味が伝えられていることは一般の消費者には知るよしもない。事例４と同様に，関係者だけに情報を伝える手段であることがよくわかる。

４）カギ

関係者だけが持っているカギや，関係者だけにわかるパスワードによって，アクセスを制限する方法を，ここではカギと呼んでおく。暗号と似ているが，暗号は知識に基づいているため，関係者以外には気付かれにくいのに対して，カギやパスワードが必要なことは，関係者以外の人間にも容易にわかる点が異なっている。

特に具体的な事例は挙げないが，ログインしないと利用できないＷＥＢサイトや，暗証番号がわからないと利用できないキャッシュカードは，これにあたる。

３．考察：「伝えない実践」の意味をめぐって

ここまでに見てきたように，「伝えない実践」は，さまざまな場面に見ることができる。おそらく，境界を作る実践は，境界を横断する実践よりもありふれていると言えるだろう。事例１～３では国家の，事例４・５では実践のコミュニティの境界で行われていたという違いはあるが，いずれの事例も，その根本には情報の流通をコントロールすることで，国家や実践のコミュニティの境界を維持するという目的があるように見える。もしも自国にとって不利な情報がどんどん流入してくれば国家を維持しにくくなるかもしれないし，もしも赤福餅の詳細な履歴がわかったとし

たら，消費者の信用を失ってしまうかもしれない。そうしたことを避けるために，情報を伝えないという実践が行われてきたのであろう。

伝えないことによって，情報を知っている人と，情報を知らされない人という線引きができる。例えば，隠語を使うことで，隠語を知っている人と，隠語を知らない人という線引きを作り出すことになる。商売上の理由で伝えない，という場合にも同様のことが生じる。例えば，有料のＷＥＢサイトは，コンテンツの利用料を得るために，お金を払ってアクセス権を得た人と，得ていない人とを線引きする。

こうした線引きは，情報の伝達がコントロールされ続けることによって維持されることになる。もし隠語の意味が何らかのメディアで採り上げられて一般に知られてしまえば，隠語を使う意味は低下してしまうし，もし有料のＷＥＢサイトのコンテンツが外部に流出してしまえば，お金を払ってコンテンツを見ようとする人は減るだろう。そうならないためには，「伝えない実践」を続けるしかない。そのようにして，知っている人と，知らされない人という不均衡を作り，そのことによって境界を維持するのが，「伝えない実践」の意味ではないだろうか。

なお，こうした実践は，国家や実践コミュニティだけでなく，個人のレベルでも，行われうるものである。岡部（2008）は，いわゆる「腐女子」が，自分が腐女子であることを一部の人にしか開示せず，日常的に腐女子であることを不可視化する実践を行っていることを指摘している。以下は，交際相手には週刊少年ジャンプを読んでいることを知らせない，というインフォマントの発言である（岡部，2008，事例４）。

> 「付き合った彼にもジャンプも読んだことないって言ってた.『ジャンプ』（週刊少年ジャンプ）は毎週買って読んでますね．未だに．でも彼氏の前では（『ジャンプ』のことは）知らない，全然知らない.」

この例では，情報を伝えないことによって，腐女子としての自分とそうではない自分，および交際相手からなる複雑な境界を維持しようとしていることが示されている。このように，「伝えない実践」は，個人的なレベルでも，実践のコミュニティのレベルでも，国家的なレベルでも行われうる。これほどまでに広範に見られるのは，境界の維持という実践が，きわめてありふれたものであることの証左であろう。

最後に，ここまでの検討をもとに，「境界」という概念について再考したい。境界横断の議論では，境界があらかじめ研究者によって設定されていることが多い。こ

のことについて，香川（2008）は「例えば，Engeström et al.（1995）は，活動システムの概念をベースに，ある船室工場には「パーツ生産部門」と「組み立て部門」という二つの文脈があり，その間で横断が起きているという形で，両者に境界を引き，分析する。しかし，この分析者による境界設定は，例えば，当事者達が構成する境界とは異なる可能性がある」と指摘している。同様に，青山・茂呂（2000）も「社会組織のバウンダリーはすでにあるのではなく実践の中で作られ，様々な制度に埋め込まれながら再生産されると考えるべき」と指摘している。

すでに見てきたように，境界は，けっして所与のもの，すでに決まってそこにあるものではない。むしろ，本論で検討した「伝えない実践」のようなローカルな実践によって定義／再定義されることで維持されるもの，と考えるべきだろう。それゆえ，境界横断の議論においても，境界がいかにして定義／再定義されるのかを，つぶさに見ていくことが必要ではないかと考える。あたかも所与のもののように境界を捉えるのではなく，当事者によって定義／再定義されているものとして捉え直すことによって，境界横断がなぜ学習をもたらすのか，なぜ実現が難しいのかといった問いが，より理解できるようになるのではないだろうか。

引用文献

青山征彦・茂呂雄二（2000）．　活動と文化の心理学．　心理学評論，43, Pp. 87-104.

Engeström, Y. , Engeström, R. , & Kärikäinen, M. （1995） Polycontextuality and boundary crossing in expert cognition: Learning and problem solving in complex work activities. *Learning and Instructions*, 5, Pp. 319-336.

岡部大介（2008）．　腐女子のアイデンティティ・ゲーム：アイデンティティの可視/不可視をめぐって．　認知科学，15(4)，Pp. 671-681.

香川秀太（2008）．　「複数の文脈を横断する学習」への活動理論的アプローチ－学習転移論から文脈横断論への変移と差異－．　心理学評論，51, 4, Pp. 463-484.

香川秀太・茂呂雄二（2006）．　看護学生の状況間移動に伴う「異なる時間の流れ」の経験と生成－校内学習から院内実習への移動と学習過程の状況論的分析－．教育心理学研究，54，Pp. 346-360.

田中貴久雄（2009）．　対米謀略放送「ポストマン・コール」．　幻冬舎ルネッサンス新書.

平井正（1995）．　20世紀の権力とメディア:ナチ・統制・プロパガンダ．　雄山閣.

福田敏之（1993）．　姿なき尖兵 ： 日中ラジオ戦史．　丸山学芸図書.

米川明彦（編）（2001）．　業界用語辞典．　東京堂出版.

Winner, L.（1986）. Do artifacts have politics? in "The whale and the reactor: a search for limits in an age of high technology", University of Chicago Press, Pp. 19-39.